
2つの指輪

鹽崎 裕

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2つの指輪

【Nコード】

N1035A

【作者名】

鹽崎 裕

【あらすじ】

幼馴染みの彩加が裏庭で功助と遊んでいた最中に2つの指輪を見付け二人でつけることになりました。彩加の様子がおかしいと功助は気づき彩加に聞いたところ彩加のつけた指輪が指から抜けなくなっていました。高校生1年生になった彩加は指輪は抜けなくなつたものの何事もなかったので普通に学校生活を送っていたのに、彩加が突然その指輪のせいで彩加にもう一人の人格、「紗奈由」という人格がいるといいだしました。紗奈由の話によると2つの指輪をどこかに納めると紗奈由の人格は消えると言いだします。そして、

彩加と功助は2つの指輪を納めるための頑張る二人の物語です。

第1話：9歳の夏

7年前の夏のある日、こうすけ 功助9歳とあやか 彩加9歳、歳が一緒で家がお隣同士、昔から一緒に遊んでいたこの2人が突然の悲劇が襲った。

いつものように彩加の家の裏庭で遊んでいた時、

「こゝちゃゝんこれ見てえゝ」

と言う彩加の言う声に功助は、

「だから功ちゃんって言うのやめろって前から言ってるだろ！はあゝ…それでどうしたんだ？」

「何だよそれ！？」

「さっき見付けたのおゝ。綺麗でしょう。」「まあ確かに綺麗だけど、どうしてこんなところに…」

彩加が裏庭で見付けたのは、功助にとってそれは不気味な2つの指輪でした。

「なぜこんなところに」

そう功助が考えている。彩加が、

「そこで落ちてたのおゝ。」

「そこに落ちてた??? 彩加そんなもの早く捨ててしまえ!!」

「いやだ！綺麗だから私と功ちゃんが付けるのゝ」

彩加は、泣きながら功助に言いました。さすがに涙には勝てなかった功助は、「わかった！わかったから泣くな！付ければいいんだろ」
功助は説得するのは諦め彩加が寝ている隙に指輪を捨てようと考えました。

そして渋谷、彩加と功助が指に指輪を入れていたその時!!

「ドサッ!!」

彩加と功助が突然倒れました。

「彩加、功助どうしたの?しっかりして!」

そして、彩加の母親が急いで近くの病院に連れていきました。

医者診断によると日光の浴びすぎによるかとい熱中症と診断されました。それで、彩加と功助はすぐに家に帰れる事ができるけど2人が目が覚めるまでは病院でいることになりました。

病院のベットの上で彩加と功助が目を覚めました…。

「彩加、功助大丈夫？」

と、心配する母親が言いました。

「変な音がしたから見に来たら二人ともが倒れてたからお母さんびっくりしたのよ！」

母親は涙目をこらえながら言っていました。そして、彩加と功助は涙を浮かべながら

「ごめんなさい」といい再び寝てしまいました。

そして、しばらくして二人とも夕方には元気になり家に帰ることが出来ました。

第2話：二重人格

家に帰り何もなかった二人を安心してみていた親たちがいました。

そして次の日、また元気よく遊ぶ二人でした。けれど功助は彩加に、「まだその指輪つけてんのか？いい加減捨てたらどうだ？絶対呪われてるって！」

そういう功助の言い分に彩加は、

「この指輪指から抜けないの…」

そう言った彩加をびつくりした目で見た功助は、

「本当か？本当に抜けないのか？だからあの時捨てろって言ったのに…」

「ごめんなさい…」彩加は涙目で言いました。

「やばっ」

と思い

「ごめん…言い過ぎた…彩加の方が辛いもん！はずす方法一緒に考えようぜ！」

と彩加にいいいんな事をしました。

けれど指輪は抜けず…

7年の月日が立ちました。彩加と功助は、めでたく同じ高校に行くことになりました。

「彩加去年も駄目だったな…今年こそはきつと外れればいいな！」

と言う功助に彩加は、

「うん。早く外れてほしいね…」彩加のそっけない返事に功助は、

「また俺に隠し事か？隠し事は俺ら二人の間ではあかんっていつも言ってるだろ！」

と言うと彩加は、

「そうだね！ごめん」

そして、功助は、

「でっ今回の隠し事は？」

「私の中に紗奈さなゆ由って娘がいるの！二重人格ってやつ！」

功助は驚きのあまり声が出ませんでした。「指輪が外れないよりすごい事になってるな…おばさんは知ってるのか？」

「まだばれてないんの！すごいでしょ！」

「ある意味な…ってさりげなく自慢すな！大変なことだぞ…！」

「ごめん…」

「彩加その紗奈由って奴に変わるのか？」

「うん、大丈夫だよ！じゃあ変わるね…」

「功助君初めまして…」

第3話：紗奈由

「初めまして…紗奈由…さん…？」

嘘だと信じたい功助だったけど紗奈由の存在は信じるしかなかった…その理由は、紗奈由に変わっている時の彩加の目の色が綺麗な青色でした…。

「彩加と同じように私のことも紗奈由って呼んでくれればいいよ！」
そう言い出す紗奈由に対して、

「わかった！紗奈由って呼ぶから俺も功助って呼んでくれ」

「えっ？…ありがとう、あと…ついでに私も彩加と一緒に、”功ちゃん”て呼んでもいい？」「何でそれを！？…まあ好きに呼んでくれ…そんなことより…彩加に戻って…」

「あつ…わかりました！戻ります。」そして、紗奈由の青い目から黒色に戻りました。

「彩加！？」

「うん！彩加だよ、どうだった？初めて会った感想は？」

「驚きしかねーよ！」

「まあ私もね初めはびっくりしたけど、今はもう馴れちゃった！」

「彩加その…さ…紗奈由はいつからいるんだ？」

「うわぁ…功ちゃん顔赤くなってる」

「うるさいな！初対面でいきなり呼び捨てだぞ！恥ずかしがるのも当たり前だろ！？…もういいよ！それでいつから紗奈由がいることに気付いた？」

「1ヶ月前くらいかな…いるのに気付いたの…急に睡魔が襲ってきたそのまま寝ちゃってそしたら夢の中で紗奈由と会ったの…それで1ヶ月の間で仲良くなっちゃった」「仲良くなっちゃったって…どうしていつも前向きなんだ？尊敬するよ…」

「でしょ…尊敬してね。」

「バカ！誉めてるんじゃない！！」

最終話：そして…

こうして彩加と功助がバカをやっているうちに再び紗奈由が出てきた。

「あの話進めていいですか？」

突然の紗奈由の呼び掛けに功助は驚いた。そして、功助は今度は冷静に話を進めた。

「紗奈由：実際どうしたら彩加の指輪は外れるんだ？もしかして外れないのか？」

「…いえ…外れますよ…ただし方法が…」

明らかに難しそうな顔をして話している紗奈由に功助は、

「まさか…」

「そのまさかです…すみません…」紗奈由が突然謝ったには訳があったんです。

7年前、既にの人格があつて紗奈由は表に出ることはなく深い眠りについていました。

そのせいでどうしたら指輪が外れるのかは忘れてしまいました。

功助はやつと指輪が外せれると思ったのに少し険しそうな顔で紗奈由に問掛けます。

「紗奈由、例えば指輪が外れなくても彩加に何も害はないだろ？」

紗奈由は即座に、

「はい、何も害はありません。」「もし、彩加に何かあつたら俺は一生紗奈由を許さないからなー!」

突然怒りだす功助に彩加もびっくりした顔で功助を見てこう言いました。

「何もないって紗奈由言ってるでしょ！少しは信じなさい！…ごめんね…紗奈由」

功助は少し反省してこう言った…。

「これからどうするんだ？紗奈由が外しかた思い出すまで待ってる

のか？」

すると紗奈由は、

「もういいんじゃない？私と紗奈由は7年間も一緒に過ごしてきたんだよ！例えこの指輪が外れなくても私には何も影響がないんだからこれからも一緒にいる。」

彩加の申し出に功助は、

「…しょうがない…彩加がそう言うなら彩加にまかせるよ！」

そして紗奈由は、

「ありがとうございます。」

そして、指輪は外すことはありませんでした。

……しかしこの話はまだ終わっていません。

彩加は20歳を向かえると同時に尊い命を落としてしました。

その訳とは、紗奈由が指輪が外れなくなてからの11年間彩加の精気をずっと吸いとっていました。

そして最後に紗奈由が功助に残した言葉があります。それは、

「馬鹿な人間めがこれだから人間は面白い…さて…そろそろ次の獲物でも探しに行くか…若い女特に20歳までの精気が一番の若さを保つ秘訣だからな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1035a/>

2つの指輪

2010年10月11日04時52分発行